

月野ほほな

## 伊藤伊那男さんを悼む

# 一期一会に感謝した俳人

〈みずさなる情懐は大きき蓮  
伊藤伊那男〉（『然々』より）

伊那男さんと初めて会ったのは、東京・神保町の居酒屋「銀漢亭」。主人の伊那男さんは、その俳号から同郷の方に違いないと信じ、在任の米国ニューヨーク市から上伊那郡箕輪町に帰郷中の2010年6月、電車を乗り継いで訪ねたのだ。はだしで優しい笑顔で穏やかに話す伊那男さんは駒ヶ根市のご出身であり、さらに伊那北高等学校の先輩に当たることがわかった。

〈瓜採む欲得の世の傳に  
る〉（『然々』より）

伊那男さんは、慶応大卒業後、大正証券会社に勤務。その後、ブル期に設立した金融会社の倒産を経験した。2年後の03年、料理の腕を生かして53歳で「銀漢亭」を開業。17年間、看板を守り抜いた。俳句は33歳から始め、俳句結社「春耕」に入会。49歳で上梓した第二句集「銀漢」で第22回俳人協会新人賞を受賞。11年に俳句誌「銀漢」を創刊。19年に第三句集「然々」で第58回俳人協会賞を受賞している。

〈井月の鶴とくからも雪解風

（『銀漢亭』ほれ嘘』より）  
伊那翁を邂逅した俳人、井上

井月（1822〜87年）を世に出した下島空谷と郷里を同じくする伊那男さんは、2014年の著書「邂逅した俳人 井上井月」にて井月の人生と作品の魅力を生かすにつり上げた。また、長年にわたり、井月の名を冠した俳句大会の実行委員長を務め、井月の知名度の向上に大きく貢献した。伊那男さんにとって最後となった「第34回信州伊那井月俳句大会（昨年9月）」の大感懐は記憶に新しい。

〈妻と妻のためのまなごた  
何ほ〉（『知名なほ』より）  
〈或るときは家族の数の福壽草〉  
（『然々』より）

私生活では、初任地の京都支店で出会い、一頁をもつて、30年余り連れ添った妻光代さんを、06年にがんごうす（享年55）。その後、多くの孫に恵まれ、晩年は長女の家族を暮らしていた。

「銀漢亭」閉店後は、俳句や旅を堪能しながら充実した日々を送っていたが、23年、74歳の秋に胆管がんを発症。大手術の後、療養を続けながら、昨年7月7日、76歳の誕生日に上梓

を果たしたが、第四句集「狐禿」だ。

「『狐禿』とは井月の句で知った言葉で『思いがけぬ幸福・饒幸』を指す。思えば私の人生は狐禿であったと、あとがきで題名の由来を語っている。

〈生きてある証海風を噛み切るも〉  
〈冬蝶に此岸を掴む力かな〉  
〈山芋が粘り撞撃と廻る〉  
〈ふるまごく夜霧を厚く着て啼る〉  
〈初夢の妻に長生きなぞを詫言〉（全く『狐禿』より）

確かな骨生に基づいた作品の味わいは、自然詠においても生活詠においても、豊かな感情から鮮やかな造詣までと幅広い。どの句からも作者の魂が滲み、読む者の心を打つ。

書文にある「俳句は自然と神仏と人に対して、感謝と祈りを籠めた言葉である」という伊那男さんの思いを自らにしたとき、ある句座で伊那男さんがこう語ったことを思い出した。

「百歳の真の細道で、弟子たおは、ただの一度行き会って一回限りの句会を持つ。もこれしかない覚悟で句会に臨む。あらゆる句会は一期一会だと思え」

伊那男さんは、句会のみならず、人生の中で訪れたあらゆる出来事や人の出会いを、一期一会と心得て、感謝の心で受け入れていたのだと思う。その一として授かった、俳句と伊那翁が私にもたらしてくれた伊那男さんとの縁に、この狐禿に深く感謝しつつ、心より幸福をお祈り申し上げる。

（俳人）

◆ ◆  
伊藤伊那男さんは昨年11月14日死去、76歳。



「銀漢亭」のカカウインターに立つ伊藤伊那男さん＝2019年4月